

コレクティブハウジングにおけるコモンミールの意味に関する一考察：コレクティブハウス秋桜を事例として

稲見 直子

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

The Meaning of Common Meals in Collective Housing: Insights from Collective House Kosumosu

INAMI Naoko

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本稿の目的は、コレクティブハウジングにおけるコモンミール（当番制の炊事と共食）の仕組みと意味を考察することである。

先行研究では、入居前後の一定期間や一時点での量的調査によって、コモンミールが居住者の集団形成や意識変容に影響を及ぼすことが示唆されたが、実際にコモンミールが集団形成を図る上でどのように機能しているのか、また、コモンミールを通じて居住者個人や家族がどのように変化していくのが、長期的かつ質的に把握できていなかった。

そこで本稿では、「コレクティブハウス秋桜」を事例に、長期的に収集したフィールドワーク、インタビュー、議事録からの質的データを基に次の2点を明らかにした。(1) コモンにおけるコモンミールの合理的かつ柔軟な仕組みが、居住者間の協同性や共同性を促進するだけでなく、個々のプライベートな生活とコレクティブの生活を両立させる持続的な集団形成に寄与していること、(2) 個人単位で担うコモンミールの仕組みは、新たな社会的役割を獲得する個人や、相互依存的な関係の中で相対的に自立／自律を図る個人を形成するとともに、性別役割分業に依らない家族や家族外にケアを開いていく家族といった、家族のあり方自体も再編すること、である。

これらの考察を通じ、本稿では既存の家族や会社といった社会集団とは異なる、個人のあり方に依拠した社会集団の可能性を提示した。

This study examines the system and meaning of common meals (cooking in rotation and communal dining) in collective housing. Previous quantitative research has focused on specific periods and has indicated that common meals are related to group formation among residents and their conscious change. However, limited qualitative studies have examined how common meals function in group formation and change individuals and families.

This study reveals two insights using qualitative data from Collective House Kosumosu in the long term. (1) The efficient and flexible system of common meals in common space not only promotes cooperation and communality among the residents but also contributes to sustainable group formation, which balances their private and collective lives. (2) Common meals foster individual development by acquiring new social roles and achieving relative independence/autonomy while maintaining interdependent relationships among the residents. Consequently, the family may reorganize beyond the gender-based division of labor and foster care that extends beyond the family.

Through these discussions, this study presents the possibility of social groups based on individuals, opposed to the existing social groups, such as family and company.

キーワード：集団形成、個人と家族の変容、協同性、相互依存性、ケア

Key Words: group formation, reforming individual and family, cooperation, interdependence, care

1. はじめに

本稿の目的は、コレクティブハウジング（以下、「コレクティブ」と略称）」と呼ばれる暮らし方を取り上げ、そこでの主要な活動となるコモンミール（当番制の炊事と共食）の仕組みと意味を考察することである。

コレクティブとは、個別の住戸群と複数の共用空間が組み合わさった集合住宅のことである。スウェーデンを発祥とし、現代では居住者たちが共用空間を使って自主的に生活の一部を協同化¹⁾するコレクティブが一般的である（Vestbro 1997）。日本で最初のコレクティブは、1995年の阪神・淡路大震災後の復興過程において、被災高齢者の孤独解消を主な目的として取り組まれた震災復興公営コレクティブである。神戸市を中心に兵庫県内に10軒事業化された（石東・コレクティブ応援団 2000）。民間のコレクティブとしては、コレクティブ事業を専門に担う「NPO コレクティブハウジング社（以下、当NPOの略称にしたがって「CHC」と略称）²⁾」によって、2003年にスウェーデンのコレクティブをモデルとする多世代型の「コレクティブハウスかかん森（以下、「かかん森」と略称）」が東京都荒川区に誕生した（小谷部 2004）。その後もCHCは、関東の都市部を中心に5軒のコレクティブを事業化している³⁾。

コレクティブの代表的な自主的活動がコモンミールである。日々の生活の一部として営まれるコモンミールは、建築学・住宅学を中心とする先行研究において一定の評価がなされてきた。例えば、岡崎愛子と小谷部育子は、かかん森入居前に実施された「お試しコモンミ-

ル」を通じて、入居予定者のコモンミールに対する意識がどのように変化したのか、また、その要因を調査している。調査方法は、入居前に実施されたワークショップ（以下、「WS」と略称）や定例会の参与調査のほか、入居予定者を対象に実施した「お試しコモンミール」終了後のミニアンケート（全11回分）および同コモンミール経験後のアンケート（全5回分）である。その結果、お試しコモンミールを複数回実施する中で、参加者の間でコモンミールを肯定的に捉える意識が高まったほか、「共に調理を担い、共に食事をするのが、かんかん森のコミュニティ形成に欠かせないと感じ」るようになったことを明らかにしている（岡崎・小谷部 2003: 208）。さらに、こうした意識変容の要因として、先進事例についてのヒアリング、空間整備への参加、お試しコモンミールの3点を挙げている（岡崎・小谷部 2003）。

また、岡崎と小谷部は、かんかん森入居開始から1年間で居住者のコモンミールに対する意識がどのように変化したのかも調査している。調査方法は、コモンミールや定例会への参与調査、居住者が作成した活動記録や資料、居住者のメーリングリスト、入居前に実施したアンケート（2002年11月）、研究グループによるアンケート調査（2004年8月～10月実施）⁴⁾である。その結果、入居1年後には、居住者はコモンミールを「日常生活の一部として当たり前のよう捉えるようになった」という意識の変化が見られたほか、コモンミールの調理については「月1回の調理で月12回の食事ができる合理性」や「協働調理の喜び」といった点、コモンミールの食事においては「共に食べる楽しさ」といった点で評価が高くなったことを明らかにしている（岡崎・小谷部 2005: 160）。

水村容子によるスウェーデンのコレクティブ3住宅を対象とした研究もある。同研究でも、各住宅のコモンミールの運営方法とコモンミールの意義について調査している。調査方法は、居住者へのヒアリング調査、コモンミールの調理の様子の観察（2019年11月）、アンケート調査である。その結果、「互いをよく知るために共に作業できる」「住民同士の結びつきを強める」「家事労働を軽減できる」といった点でコモンミールが評価されていることを明らかにしている（水村 2020: 71）。

これらの先行研究を整理すると、コモンミールには合理性をはじめ、居住者間で協力して働くという「協働」性や、食事を共にするという共同性といった特性が備わっていることが見てくる。さらに、「協働調理の喜び」や「共に食べる楽しさ」といった点から、コモンミールはこれらの特性を機能させながら、居住者たちの集団形成や居住者個人に何らかの意味をもたらしていることもうかがえる。しかし、これらの先行研究は、入居が開始された前後の一定期間や一時点でのアンケート調査を主に用いて分析を行っているため、これらの特性を有するコモンミールが、集団形成を図る上でどのように機能しているのかが長期的かつ質的に把握できていない。また、先行研究では、コモンミールを通じて居住者の意識面で変化が見られたことが明らかにされたが、コモンミールが生活の一部として組み込まれている以上、コモンミールによって居住者の意識面だけでなく、居住者個々の生活や家族の生活においてもどのような変化がもたらされたのかを見ていく必要があるだろう。

そこで本稿は、これらの課題を乗り越えるべく、長期的に実施したフィールドワークやインタビュー、および議事録といった質的データを用い、コモンミールが居住者間の集団形成

を図る上でどのように機能しているのか、また、コモンミールを通じてそこに暮らす居住者個人のあり方や家族のあり方がどのように変化するのかを考察する。

コレクティブという社会集団を題材として、他者と共生していくための秩序と様式をいかにして作り上げていくことができるのか。この点について、本稿では居住者がコモンミールに対して抱く意味から考察を図る。

2. 調査概要

本稿が事例として取り上げるのは、東京都郊外に位置する「コレクティブハウス秋桜（以下、「秋桜」と略称）⁵⁾」である。秋桜は、個人事業主と CHC との共同事業として建てられ、2009年4月にオープンした。秋桜ではオープンから2カ月後にはコモンミールが始まり、それから15年が経った今でも継続して行われている。こうした理由から、秋桜は本稿の主題を検討する上で格好の事例と考えられる。

2024年11月1日現在、秋桜には29名（うち、子ども7名）が暮らしている。年齢は2歳から70歳代までと多世代にわたる。世帯数は全部で17世帯、うち単身世帯が12世帯（うち、女性11世帯、男性1世帯。65歳以上が3世帯）、核家族世帯が4世帯、夫婦世帯が1世帯と世帯規模・構成にも幅がある。

分析に用いるデータは次の3つである⁶⁾。1つ目は、秋桜のコモンミールを観察したデータである。観察期間は2016年1月～2017年3月、2018年3月～2020年3月、2022年8月～2024年8月までである。調査は毎月1回開かれる定例会後のコモンミールを中心に行い（定例会の日はコモンミールが開催されることが多い）、筆者自身もコモンミールの調理を手伝ったり一緒に食事をしたりしながら、調理中に当番同士がどのようなやりとりをしているのか、コモンミールがどのような手順で行われているのか、食事中に居住者同士でどのような会話がなされているのかを中心に観察し、それらをフィールドノートとしてまとめた。

2つ目は、居住者6名を対象としたインタビューデータである。この6名を選んだ理由は、インタビューを行った人の中でもとりわけコモンミールについて精通し、詳しく語ってくれた人たちだからである。インタビューでは半構造化面接法を用い、入居当初から現在に至るまでコモンミールがどのように展開されてきたのか、コモンミールがコレクティブや自身にとってどのような意味や意義があるのか、コモンミールを実施する上での問題や課題などを中心に話を伺った。調査期間は2016年2月～2024年8月までで、インタビュー回数については、Eさん以外はそれぞれ複数回にわたって行った（Aさん2回、Bさん3回、Cさん2回、Dさん3回、Fさん6回）。インタビュー時間は30分から2時間程度である。さらに、CさんとDさんについては、後日メールを通じて追加調査も行った。表1は対象者の概要をまとめたものである。

3つ目は、定例会とWSの議事録である。定例会の議事録は秋桜がオープンした2009年4月～2024年10月に至るまでの全記録で、居住者組合の同意を得た上で入手した。WS（年2回開催）の議事録も初回から現在に至るまでの全記録をCHCから提供していただいた。これらの議事録を分析するにあたっては、いずれの議事録にもすべて目を通し、コモンミールに

表 1：インタビュー対象者の概要

対象者	性別	年齢 (2024/10/1 現在)	職業 (入居期間中)	同居家族 (入居期間中)	入居期間 (年 / 月)
A	女性	50 歳代	公務員	夫	2009/5 ~ 現在
B	女性	40 歳代	会社員	夫、長男、次男、三男 (後に、長男は退去)	2009/5 ~ 現在
C	女性	30 歳代	会社員→自営業	なし	2017/10 ~ 2023/11
D	女性	30 歳代	会社員	夫 (E)、長男、長女	2018/4 ~ 2021/3
E	男性	30 歳代	会社員	妻 (D)、長男、長女	2018/4 ~ 2021/3
F	女性	50 歳代	会社員	夫、長男	2009/4 ~ 現在

関する内容を中心に、定例会ではコモンミールについてどのような問題や課題が議論されてきたのか、WS ではコモンミールの意味について居住者からどのような意見が出ていたのかといった点を抽出した。なお、いずれの議事録も秋桜の居住者組合および CHC から許可を得た上で引用・参照している。

なお、コモンミールの表記については、原則「コモンミール」とするが、居住者の語りや通称名(例えば「ミールグループ」)において「ミール」と表現されている場合はそのまま「ミール」と表記する。また、データの引用に関しては、フィールドノーツからの引用は(年/月/日、fn)、定例会や WS の議事録からの引用はそれぞれ(年/月/日、定例会議事録)、(年/月/日、WS 議事録)とする。

3. コモンミールの「空間」と「仕組み」

ここではまず、議論の見通しを良くするため、コモンミールが実施されている空間、およびコモンミールの運営の仕組みについて見ていく。

3.1. コモンという空間

秋桜の建物は個別の住戸群と複数の共用空間で構成される。住戸は全部で 20 戸あり、すべて賃貸である。住戸タイプは 2 人用のシェア住戸から、ワンルーム、1LDK、2LDK まで設計上多様な世帯の居住が想定されている。各住戸には台所と浴室とトイレが完備され⁷⁾、プライバシーが確保された 1 つの独立した住戸である。共用空間としては、コモンスペース(以下、「コモン」と略称)をはじめ、和室やウッドデッキ、屋上菜園や庭などがある。

コモンミールは、秋桜の共用空間の中心となるコモンで行われる。広さ 72m²もあるコモンは、秋桜の建物の 1 階中央部分かつ 2 階へとつながる階段付近にあり、1 階からも 2 階からも各住戸からアクセスしやすい位置にある(図 1 では中央下)。コモンを含む共用空間は、個々の住戸の延長として位置づけられているため(小谷部 1997)、居住者であればいつでも好き

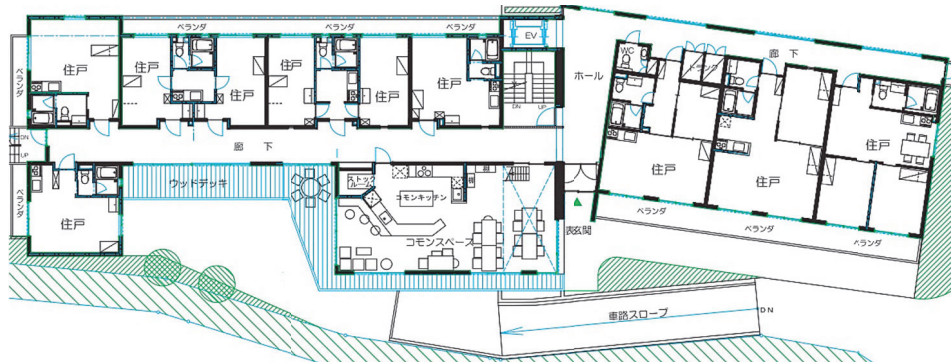


図1：秋桜1階平面図⁸⁾

な時に利用することができる。

コモン自体は大きく分けてキッチンとダイニングからなる。キッチンの中央にはアイランド型の調理台が設置され複数名で調理ができるほか、設備としては大型コンロ3口と大型炊飯器が2台、業務用オープン、大型食洗器が完備され、大人数分の調理や食器洗いが可能である。他にも、大型の鍋やボールなどの調理機材、約30人分の食器類、布巾や手拭きタオルなども揃えられており、それらはすべて居住者共用のものとなっている。また、ダイニングにはテーブル5台が設置され、4～6人で1つのテーブルを囲むことができる。

このように、コモンという空間は、コモンミールを可能にする一定の広さと設備、アクセシビリティを備えている。そのため、ここでは大人数分の調理と食事が容易であり、コモンミールを円滑に実施するための機能的な空間として極めて重要な位置を占めている。

3.2. コモンミールの仕組み

コモンミールは居住者組合⁹⁾の活動の1つとして制度化されたものである。秋桜の居住者組合は、複数の係や活動グループで構成され¹⁰⁾、それぞれ担当分野の運営を担う。ただし、係や活動グループの仕事はあくまでも運営上のマネジメントが中心で、作業自体は居住者(組合員)全員に割り振られる。その際、作業は世帯単位ではなく個人単位で担う。例えば、コモンミールに関して言えば、食器類や家電の購入、会計のとりまとめ、当番表の作成など運営上のマネジメントはミールグループが行うが、当番自体は居住者全員が担うことになっている。

秋桜では、コモンミールの当番は一人で担うこともできるが、たいてい「メイン」と「サブ」とでチームを組んで行われている。メインは、献立から買い物、調理までを中心的に担い、サブはメインをサポートする。秋桜では、居住者はメインとサブをそれぞれ原則月1回担うことが求められている。コモンの壁には1ヶ月分の日付が縦に並んだ表が貼られており、日付の右横にはメイン、サブ、片付けサブ、メニュー、住戸ごとの注文数を記入する欄がそれぞれ順番に並ぶ。月初めには居住者はメインに入れる日に自分の名前とメニューを表に書き込み、メイン以外の人はそれを見てサブに入れる日に名前を書いたり(片付けサブは希望制)、

注文数を記入したりする。食費は1食あたり大人1人460円で(子どもは半額)、そのうち400円を食材費にあてることができる(残りの60円は水光熱費と調味料・米代)(2024年10月現在)。

したがって、コモンミールは、居住者が平等に当番を担いながら各世帯の食事面での家事労働を集約化し、月1回の当番日以外は他の当番が作った食事を安価で享受できるという非常に合理的な仕組みとなっている。

4. コモンミールのある暮らし

「ミール、イコール、ほんとにコレクティブ」(Bさん)

「コモンミールはハウスのやっぱり中核的なもの」(Cさん)

「ミールはやっぱり秀逸」(Eさん)

これらインタビューの発言から、居住者にとって、コモンミールは、秋桜というコレクティブの暮らしにおいて必要不可欠なものであることがわかる。2節でも述べたが、秋桜ではオープン当初からコモンミールは一度も途絶えたことはなく、その開催頻度には変動があるものの、15年が経ったいまなお続けられている¹¹⁾。2024年10月は、週に2~3回、1ヶ月あたり14回実施されている。以下では、秋桜においてコモンミールのある暮らしがどのように展開されているのかを見ていく。

4.1. コモンミールを協同して作る

先述したように、秋桜では、コモンミールを調理する時、たいていメインとサブとでチームを組んで行われている。Aさんは「今まで1人で[コモンミールを]作ったことがなく、「1人だったらもう辞めます」と言うほど、メインを担当する時は毎回必ずサブを募集している([]は筆者補足。以下同様)。その理由として「ただ作ればいいっていう作業とは思ってなくて、作る時に誰かしらと一緒に作業をすることで、やっぱり、その人と関われたりお話ができたりする」からだ」と話す。例えば、以下はある日のコモンミールの調理風景である。

この日は、入居9年目のFさん(女性・40歳代)がメインを担当し、3ヶ月前に入居してきたばかりのGさん(女性・60歳代)がサブに入る。メニューは麻婆豆腐、わかめスープ、もやしのナムル、フルーツである。筆者が16時半過ぎに到着した時にはすでに準備が始まっており、Gさんは麻婆豆腐に使うニンニクとネギのみじん切りを終えていた。Fさんがデザートのパイナップルを冷蔵庫から2つ取り出すと、Gさんが「手伝いましょうか」と声をかけ、Fさんは「助かります」とそれらを手渡し、カットの仕方を伝える。Fさんがスープの味付けで鶏ガラ粉末を入れる時には、「[粉末を]レシピ通りに倍がけしていれるだけだと味が薄くなるので気をつけないといけないんですよ」と、大人数分の調理のコツをGさんに助言する。作業の合間には「出身はどちらですか」「うちの子、最近水泳を習い始めたんですよ」といった会話がなされる。Gさんはパイナップルのカットに苦戦しながらも、きれいに飾り切りを施し皿に盛りつけていく。2時間経ち一通り準備を終えると、FさんはGさんに「ありが

とうございます。ゆっくりしてください。だいぶ助かりました」とお礼を言う（2024/07/20、fn）。

こうした一連のやりとりには2つの意味合いがある。1つは、相互理解を深めることである。言語を介してメインとサブが個別にやりとりすることで相手のことを知れるのはもちろんのこと、相手の作業の仕方や進め方といった非言語的なコミュニケーションを通じて「この人、これ苦手なんだとか、この人、こういうの得意なんだ」とかがわかる。「ずうっとしゃべりながらってわけではないけど、一緒に何かを作るとか何かするって、ずうっと言葉だけのコミュニケーションじゃないコミュニケーション的な」ところが「ミールの良さというか、ハウスの作業の良さ」だとAさんは話す。もう1つは、メインとサブとの間に築かれる協力関係である。例えば、メインはサブに自身の指示に沿って20～30人分の食材のカットや盛り付けなどを手伝ってもらっている。一方、サブは、メインからコモンミールの段取りや調理のコツなど、コモンミールを作る上で必要なノウハウを伝えてもらう形で協力してもらっている。つまり、コモンミールでは作業を共にする中で、手伝ってもらったり助言をしてもらったりといった双方向的な協力関係が次第に出来上がる。

4.2. コモンミールを共同して食べる

出来上がった食事は自室で食べることもできるが、大半の人はコモンで食事をとる。普段、秋桜の居住者たちはそれぞれのプライベートな生活を中心に過ごしているため、住居内で互いに顔を合やすことはそれほどない。したがって、開催の日時と場所が決まっているコモンミールは、「頑張らずに近所の人に会うことができる」（2015/1/不明、WS 議事録）機会である。

そこに行くと誰かしらがいて、ミールを食べながら、ほんとに世間話とか、たわいもない話をして、すごく疲れてて今日はもう部屋で食べようかな、とか思うときもあったんだけど、いや、でもちょっとコモンで食べていこうかな、何人かいるし、みたいな感じで食べると、逆に疲れが癒されるというか、くつろげるっていう、（略）ご飯自体もありがたいし、食べて終了じゃなくて、そこに行けば誰かしらとつながれるっていうのがありがたい。（Aさん）

コモンで食べる人数は平日で10名前後、週末では20～30名にも及ぶ。居住者はコモンに入ってくるとキッチンから食事をとり、各々自由に空いている席についていく。家族単位で座る人もいるが、多くは家族に関係なく子ども同士、大人同士、あるいは子どもと大人とでテーブルを囲んで食べる。食事中はそれぞれのテーブルでその日のコモンミールに関することや仕事や家族の話題、地域に関する情報交換や自身の健康状態など日常の「たわいもない話」が中心だが、互いに冗談を言い合ったり、共感し合ったり、意思疎通を図り合ったりしながら、それぞれの性格や価値観などを知っていくことができる。

このように、コモンミールを通じて営まれる協同の調理や共同の食事といった個人レベルでの対面的な相互行為は、秋桜に暮らす居住者たちの間で相互理解を図りながら建設的な人

間関係を築いていく上で重要な役割を果たしてきたことがわかる。

ただし、ここで重要なのは、居住者同士でこうした人間関係を築きつつも、互いに適度な距離を保っていることである。例えば、先述したように、コモンミールは必ずしもコモンで食べる必要はない。疲れていたり気持ちがのらなかつたりする時は、自室に食事を持ち帰って食べることもできる。これは、コモンとは別にプライバシーが保たれた個別の住戸があり、物理的に距離がとりやすいことも大きい。また、居住者同士が会話をする際は、「話したいことを話すのは聞く」が「話したくないことはあえて聞かない」「自分も話したくないことはあえて言わない」という暗黙のルールがあり、居住者の年齢や職業の具体的内容について互いに必ずしも熟知しているわけではない（2016/5/7, fn）。普段の生活においても「結構、付き合い [は] あっさりして」（Dさん）おり、廊下で会っても挨拶をする程度で、子どもたち以外は互いの住戸を行き来することはめったにない。Dさんは「日常のときは結構距離 [を] 置いて」いるが、「困ってるよってとき、結構みんな助け合う。それがいいなと思って」と話す。

4.3. コモンミールが支える個人と家族の暮らし

コモンミールは、居住者一人ひとりの生活の支柱としても欠かせない。例えば、関西から上京し、単身で秋桜に暮らしていたCさんは次のように話す。

「一人だったら、夕食は」買ってきて、に絶対なつたと思うけど、ミールさえ頼んでおけば、いくら仕事が遅くても、ちゃんとお飯ができてるっていうのは、本当ありがたかったし、食べれなくても、次の日のお昼に持って行くとかができたので、それは本当にありがたかったし。

当時、不動産関係の仕事をしていたCさんは、1時間半以上かけて都心部まで通勤し、週末は休みなく働く日々を送っていた。「仕事が忙しかったりすると、[家には] 寝に帰るだけ」だったため、「一人やったら、基本的にもう食べないとか、作らない」生活になっていたと言う。残業も多かったため、コモンミールの開始時間までに帰宅することはほとんどできなかったが、それでも食事を取り置きしてもらっていたおかげで、食生活の面では随分「楽」になったと話す。

同様の語りはAさんからも聞かれた。

今日はミールがあるから仕事気にせずにできる、みたいな感じで、遅く帰ってきてもご飯がある、しかもそのご飯が手作りで、誰かしらが、みんなのためを思って、知ってる誰かがみんなのためを思って作ってくれる、すごく手の込んだ、すごい手の込んだっていう意味は、自分だったら遅く帰ってきたら作れないだろうなっていうような、そういう手の込んだものを作ってくれるっていう。それがすごく、おいしくてありがたいな。

教育関係の仕事に就く A さんもまたフルタイムで働いており、平日は 19 時～ 20 時台に帰宅する日々である。夕飯の準備はたいい A さんよりも帰宅が早い夫が担当するが、食材の管理などは A さんが行っているため「ミールがないってなると、本当、朝から [夕飯は] 何食べる、何作る、とか。[夫から] ちょっと LINE で [レシピを] 送っというとか言われると、私もう [冷蔵庫の] 食材を見てこう何か調べてレシピを送るまでを朝やんなきゃいけない」ため、「今日はミールがあるんだとか、どうだろうかって、結構、わが家では大きな問題」だと話す。それに対し、コモンミールがある日は、「切羽詰まった気持ちにもならないし、(略) ゆっくりミールを味わって、その分の余った時間を違うことに回したりもできるし、気持ちの余裕が違う」と A さんは話す。

子どもがいる家族にとっては、コモンミールの意義はなおさら増すことになる。フルタイムで働きながら子育てをしている D さんも片道 1 時間半をかけて都心部まで通勤していたが、「帰ってミールがあるってことを考えると相殺」と述べるほど、コモンミールの良さを実感していた。当時、夫の E さんは仕事が忙しく毎朝子どもを保育園に送ることしかできなかったため、時短勤務をしていた D さんが家事育児を一手に引き受け「実質ワンオペ」状態だった。平日は 17 時前に仕事を切り上げ、子どもを保育園に迎えに行き、帰宅して夕飯を支度すると、出来上がるのは早くても 19 時半、遅い時には 20 時を過ぎていた。D さんはコモンミールについて「帰ってきて [あったかいご飯とみそ汁が] できてるってだけでもすごくありがたかった」と話す。同じく、3 人の子どもを育てながらフルタイムで働く B さんも、「メニューを毎日考えるっていう、(略) そこから解放されてるっていう心理的な部分。(略) 『あ、今日何も考えなくていい』 っていうのが一番、助かっている」と、コモンミールが献立の手間を省き、心理面での負担軽減につながっていると述べる。

また、コモンミールの時間は育児面での手助けにもなる。D さんは秋桜入居前、「仕事もして、家事必死にこなし、子どもと向き合う時間がないっていうのは精神的にしんど」だったと言う。特に、夕飯の調理中は子どもの相手ができなかったため、子どもにとって「テレビが友達」という状況がとても「嫌」だった。だが、秋桜入居後は、コモンミールができるまでの間、「私も彼の相手ができますし、他の人も彼の相手をしてくれる」ようになった。事実、コモンミールの準備中、コモンでは子どもたちだけでゲームをしたり動画を観たり、時には大人も一緒になって遊んだりしながら過ごす様子は秋桜の日常の光景としてよく見られた (2019/3/16、2019/7/20、fn)。D さんはこうして「安心して子どもから目が離せる」環境が「めちゃくちゃ楽」だったと話す。

一方、働く男性にとってもコモンミールは家庭でも職場でもない「活躍の場」(D さん) を提供する。E さんはずっとコレクティブのことは知らなかったが、妻の D さんに勧められ秋桜入居に同意した。その理由を次のように述べる。

結局自分の家の暮らしと会社を行き来するだけではなくて、やっぱり社会との接点と
いうのを持つべきじゃないのかみたいな。(略) 住んでいる中で、他の人と関わったり社
会を感じるっていうのはすごく大切なことだし。

秋桜入居前、社会人として10年以上が経ち、仕事中心の生活を送っていたEさんは、「住んでいる中で、他の人と関わったり社会を感じる」ことができるコレクティブに惹かれ入居を決めた。入居後、Eさんはコモンミールの当番を積極的に引き受け、オリジナルのレシピを考案するなどやりがいを持って手作りの料理をふるまっていた(2019/11/23、fn)。こうした夫の様子を見て、Dさんは「ミールって自分の居場所感を作ってくれたりする場所だし、自分の存在をみんなに還元するような場だったりするんで、すごく彼にとって意味がある場だった」と述べる。

また、コモンミールは孤立の防止という点でも居住者の生活を支えている。特に、在宅生活を中心とする高齢者にとっては、コモンミールは日常生活の中で自ずと他者と関われる機会となる。例えば、一人暮らしのHさん(女性・70歳代)は、定例会でコレクティブの価値について次のような発言をしている。

コモンに行った時の何気ない会話ってというのが、結構私にとっては皆さんとの会話が、気分転換になるなっていう感じです。もう仕事もしていないので、社会とのつながりが少なくなってきているので、少しでも外に出て、ないしはハウスの方たちと何気ない会話を楽しみながら生活していけたらいいなと思っております(2020/10/17、定例会議事録)。

Hさんには頼りになる家族・親族や友人はおらず、仕事を退職後は、体調不良や骨折などにより入退院を繰り返し、最近は介護サービスを受けながら療養生活を送っている。だが、コモンミールがある日はほぼ毎回コモンに顔を出し、他の居住者と食事を共にしたり、ちょっとした会話を楽しんだりしている。体調が良い時にはサブに入って手伝ってくれることもある。食事の時間以外にも、コモンミールの表を確認しにコモンに来た際、居合わせた居住者と会話を楽しむHさんの様子もたびたび見られた(2024/07/20、fn)。他の居住者にとっても、Hさんがコモンミールに姿を現すことで、彼女の体調具合や近況を知ることができ、何かあれば個別に手助けをしたり、コレクティブとして解決策を考えていたりするきっかけにもつながっている¹²⁾。

5. コモンミールの意味

以上、秋桜を事例に、コモンミールのある暮らしがどのように送られているのかを見てきた。この点を踏まえ、以下ではコモンミールが秋桜に暮らす居住者にとってどのような意味をもつのかを考察していく。

5.1. 集団形成の場

まず、コモンミールは居住者同士の集団形成に寄与してきた。その重要な機会の1つが食事を協同で作ることである。4.1. で見たように、コモンミールの調理場面では、料理という作業を通じて居住者同士が協力関係を築いたり、調理中の雑談を通じて相互に理解や親睦を深めたりしていた。

こうした協同作業や雑談が可能になるのは、コモンミールの仕組み自体が、誰にとっても理解しやすく実行可能でシンプルなものだからである。例えば、コモンミールは役割が明確化している。当番の役割はあくまでも料理をすることであり、それ以外の会計のとりまとめや備品管理など煩雑な作業はすべてミールグループがしてくれる。当番においても、メインが中心的な担い手、サブはメインの補助といった具合に役割が明確に分かれている。もちろん、メインを担い始めの頃は、味付けが薄かったり食材が足りなかったりと失敗を経験することもある。だが、他の居住者から助言を受けたり幾度かメインを担ったりする中で次第にコツを掴み、調理方法を学習していくことが可能な仕組みになっている。また、コモンミールではたとえ一人の人が毎回同じメニューを作ったとしても、月1回のメインゆえ、食べる側が飽きることはない。したがって、料理が不得意な人であっても、特定の料理を習得するだけでよい。実際、毎回シンガポールチキンライスや牛丼を得意料理としてふるまう人もいる。サブは基本的に食材のカットや盛り付けなど単純作業が中心であるため、作業をする上でのハードルは低く、時には4～5歳の子どもたちも「スーパーサブ」として手伝ってくれる。このように、コモンミールでは当番の遂行すべき内容が単純明快で取り組みやすい。

ルールも明確化されている。コモンのキッチンを使って実際に料理をする際は、ボールやザルや包丁などの調理器具、皿や茶碗などの食器類、台拭きや食器拭きなどの布巾類など、用途に応じて様々な小物を使う必要が出てくる。これらがどこにあるか、どうやって使い分けるかは煩雑になりがちだが、秋桜では棚にシールを貼って置いてある場所を示したり、壁に写真付の説明を貼って一目で理解できるようにしたりしている。つまり、使用目的や使い方がルールに即して視覚化・明文化されているため、わざわざ誰かに尋ねる煩わしさが無い。

設備も機能的で使いやすい。コモンのキッチンには、一度に30人分の肉や魚が焼けるオープンや1台で20人分のご飯が炊ける炊飯器、90秒で大型の鍋や大人数分の食器を洗える食洗器など、機能的な設備が充実している。しかも、それらの操作も簡単で、操作方法の説明も壁に貼っているため、誰でも容易に使いこなすことができる。

このように、コモンミールは調理の技法が比較的容易に習得できる仕組みとなっており、大人数分の料理が未経験の人や苦手な人であっても取り組みやすい体制が整えられている。

ただし、ここでもう1つ重要なのは、当番に入ること自体が、各自のプライベートな生活を送る上で過度な負担にならないように仕組みが整備されている点である。先述したように、現在、当番はメインとサブを月1回だけ、自分の都合の良い日に入ることになっている。つまり、入りたい日を自由に選択でき、個々の家族生活や職業生活を圧迫しない範囲で当番を担うことができる¹³⁾。

この点を考える上で、コモンミール開始直後に試行錯誤をしていた時期は参考になる。秋桜ではオープンから2ヶ月後にはコモンミールを始めた。当初は居住者もコモンミールに対する意欲が高かったため、平日も週末も休みなく毎日実施することを決めた。当時、当番は4人グループを作り「仕事があろうがなかろうが、もうすごいランダムに、うわって[ミールグループが当番を]入れ」、1人あたり月4～5回当番を担うことにした。そうすると、仕事から帰宅後の深夜に翌日のコモンミールの下ごしらえをする人や、朝5時に起きて当日分

の食材を切ってから出勤する人が現れた。結局、「速攻1ヶ月でもうみんなくじけて、もう無理、やめましょう」(Aさん)となった。Fさんも「毎日やってみようつってやったら [みんな] だんだん無言になっていき、みたいな。へろへろになったので、毎日はいい、みたいな。あんなにみんな盛り上がっていたのに」(傍点筆者。以下同様)と当時を振り返る。これは、コモンミールという仕組みが簡便で明快であるからといって、それを過度に機能させてしまうと、その仕組み全体が機能不全に近い状態に陥ることを意味している。

このように、コモンミールは誰でもが理解しやすく実行可能な容易さと、当番に入ること自体が過度な負担にならない気軽さとがあることが何よりも重要である。だからこそ、当番を継続的に担うことができるだけでなく、作業を遂行する過程で余裕が生まれ、一緒に料理をしながらでもちょっとした雑談を楽しむことが可能になると考えられる。

秋桜の集団形成を図る上で、この種のインフォーマルなコミュニケーションとも言える雑談が意味をもつことは、共に食べる場面においても調査を通じて確認された。4.2.でも述べたように、コモンミールの食事中に交わされる会話は「たわいもない話」や「何気ない会話」といった雑談が中心である。つまり、雑談においては、会議のように、話す目的や内容、さらには話す技法がフォーマルな形で決められ意見を求められる場とは異なり、話し手は相手を傷つけない限りにおいて何を話してもどう話してもよい。一方、聞き手も相手の話に対して何か的確な意見を出す必要はなく、相槌だけで済ませることもできる。Dさんは「今日暑いですよとか、このミール美味しいね、どうやって作るのぐらい」が「ちょうどよい」と話す。こうした気楽な会話だからこそ、そこにいて居心地の良さを感じたり、安心感を得たりすることができ、職場や家庭での役割の負担から一時的に解放されて「気分転換」や「くつろげる」ことができる。

しかもここで大事なのは、食事への参加自体の自由度が高いことである。コモンミールでは、食事を注文するかどうかだけでなく、出来上がった食事をコモンで食べるかどうかも任意である。また、コモンで食べるとしても、誰と一緒に食べるか、何を話すか話さないか、コモンにいつ来ていつまで滞在するかも各自が自由に決められる。これらの選択が居住者の裁量に委ねられているからこそ、他者といっても窮屈さや息苦しさを感ずることなく食事や雑談を楽しむことができる。

もちろん、こうした集団形成を図っていく前提条件として、コモンという物理的空間は必要不可欠である。3節でも述べたように、コモンはアクセスがしやすく出入りも自由である。また、コモンには調理家電や食器や家具が一通り揃っており、各自がわざわざ買い揃える必要がなく、物理的に不自由なく調理や食事を行うことができる。つまり、コモンは日常生活の中で居住者たちが無理せず集うことができる空間として重要な機能を果たしている。

このように、秋桜では、居住者はそれぞれ個別の居住空間を持ち、独立して生計を営み、個別のライフスタイルを送っているにもかかわらず、コモンミールというアドホックな営みを軸に人々が集い、自由度の高い形で共存する社会集団を形成することが可能になったと考えられる。ただし、これは一時的な社会集団ではなく、当番制が短期間ではなく中長期的にシステム化されていることで、その社会集団が持続的に存立することができている点にも留

意する必要がある。

5.2. 個人と家族の変容

こうした秋桜におけるコモンミールを通じた集団形成のあり方は、個人のあり方を変えることにつながっていく。それには次の2つの側面がある。1つは、新たな社会的役割を取得し、家族や会社など既存の社会集団の価値規範や役割期待から距離を置く個人である。この例としてはEさんが挙げられる。Eさんは、秋桜入居後、コモンミールの当番を担うことで、職場以外の「社会」の中で新たな役割を得たほか、それまで妻に任せきりだった家庭内の家事労働の役割を同等に担うことにもなった。こうしてEさんは、コモンミールを通じて「職場以外の役割」や家庭内での役割を見出すことにつながり、それまでの仕事中心の生活から距離を置くようになった。

ここには、コレクティブの仕組みが個人を単位として成り立っていることが大きい。コレクティブでは、性別や年齢、職業や世帯構成にかかわらず、一個人としてコレクティブ内での社会的役割が付与される。これにより、入居前に身に付けていた価値規範や役割を相対化し見つめ直す余地が生まれてくる。Eさんは、「自分が全然興味のなかったことまで当番で回ってきたりとか、経験させてもらったりということがあって、それによって自分の世界が広がった」と述べる。事実、Eさんは、秋桜退去後も、秋桜に時々コモンミールを作りに来たり、自治会やPTAに積極的に参加したりするなど、秋桜で暮らしていた時と同様、職場以外の社会的役割を見出している。Eさんは「ハウスでの3年間っていうのはすごい大きくて、(略)そういう暮らしを経て今ここにきた時に自治会とかPTAに入ろう。何もハードルなく関わろうと思える」ようになったと話す。

また、個人単位で役割を担うということは、夫婦であっても平等に当番が回ってくることを意味する。DさんEさん夫婦の場合、夫婦とも同じ職場で働き、仕事内容や給与面での待遇も同じだったにもかかわらず、秋桜入居前は妻のDさんが家事育児をほぼ一手に引き受けていた¹⁴⁾。しかし、Dさんは「ハウスに住むようになると、夫婦でも関係なく、個人として、ミールや掃除当番の役割があり、より公平に負担する意識が私たちの中にも入り、とても良い効果だった」とし、家事育児の分担を五分五分にまでした。そこにはDさん自身が夫に言い続けてきたことも大きい。Dさんは「ハウスの仕組みは、間違いなく、後押ししてくれ」と述べる。こうしてEさんは、コモンミールを通じ、家事労働を妻と等しく担うようになっていった。

もう1つの側面は、コレクティブに暮らす諸個人が織りなす社会関係の中で、他者とのつながりを保ちながら一定の自立／自律を図る個人である。これには、AさんやDさん、Cさん、Hさんが該当する。例えば、AさんとDさんはフルタイムで働きながら家事や育児を担っていたが、コモンミールが彼女たちの家事や育児の負担を緩和する一助となることで、家庭と仕事の両立を維持してきた。また、単身で暮らすCさんの場合、仕事が忙しく食事をするのもままならない状況だったが、心身に不可欠な食事、しかも栄養面や価格面に配慮された手作りの食事が、毎日ではないにせよ、定期的に準備されていることで、食事面において家族に頼らずとも暮らしていける生活を築けるようになった。Hさんにおいても、コモンミール

は食事面での世話だけでなく、他の居住者たちと日常生活の中で社会的交流を図る場を提供し、彼女の情緒面をサポートしてきた。これにより、高齢になっても家族や親族からの助けを受けずとも一人で暮らし続けることができている。

このことが可能になるのは、コモンミールが単に食事を共にするだけというのではなく、居住者たちが当番を互いに担い合うことで成り立つという仕組みが関係している。この点について、Bさんの語りは示唆に富む。

なんかコモンミールってあるからやれって言われたからやりました、なんかやってみたら「ありがとう」って言われた、みたいに、こう回っていくじゃないですか、そこで。ああこういう風にして喜ばれるんだな、こういう風にして作っていくっていうのがあって、自然に、なんか入っていく、関係を作っていくっていうのがいいあって思ってた。

コモンミールでは、誰しものが食事を作る側、つまりケアの担い手であるとともに、食事を享受する側、つまりケアの受け手としても存在している。秋桜における個人の自立／自律は、こうした共に支え合うという相互依存的な関係性が土台となって成り立っている。しかも、こうした「当番を回す」というやりとりを、イベントのように単発的なものではなく、日常生活の中で継続的に行っているからこそ、持続的な相互依存関係、ひいては持続的な個人の自立／自律が可能となる。

さらに、これら個人のあり方が変容することで、家族のあり方自体も変容していく。1つは、性別役割分業型家族の再編である。コモンミールでは夫も妻も両方が対等に当番を担うため、夫は必然的に仕事を優先するという男性役割から距離を置くと同時に、妻に偏りがちな家事労働の役割を引き受けることになる。妻からすると、自身に課されていた家事労働を夫が担うことで、これまで妻の役割とされてきた家事労働から距離を置ける。加えて、他の居住者がコモンミールの当番を担う日は、夫も妻も家事労働から解放される。このように、コモンミールを介して個人のあり方が変わることで、家庭内での性別による家事労働の役割分担の非対称性が緩和されるとともに、家事労働そのものの負担も軽減され、性別役割分業に依らない家族のあり方へと変容していく。なお、この性別役割分業型家族の再編は、前述したEさんの事例を家族の水準で見た場合での記述である。すなわち、Eさん個人のあり方の変容が家族のあり方にも連動しているのである。

もう1つは、家族内で自己完結／自己充足されるべきとされる家事や育児や情緒的サポートといったケアを、家族外の他者にも開いていく家族のあり方である。コモンミールという営みでは、家族内で自己完結／自己充足するべく行っていた食事面での家事労働を家族以外の他者にも分散させ、さらにそこから派生する形で家族以外の他者による育児援助や情緒的なサポートが行われてきた。これらを通じ、ケアの担い手はそれらの負担を軽減でき、自身の自立／自律を保持できる一方、ケアの受け手としても、家族以外の他者によるケアを受容する意識が醸成される。つまり、家族成員のケアは家族にしかできない、家族が行うべきといった家族規範が弛緩し、居住を共にする家族以外の他者ともケアを協同化していく家族のあり

方が示されることになる。ただし、ここで留意しておきたいのは、ケアを居住者たちで協同化するといっても、コレクティブ内だけであらゆるケアを引き受けるわけではない。あくまでもここでは居住者が無理をしない範囲において互いに配慮しあったり助け合ったりすることを意味しており、育児や介護や看護などにおける専門的なケアについては、地域の諸機関も適宜活用しながら重層的なケアの協同化を図っていく必要があるだろう。

6. おわりに

以上、本稿では、秋桜を事例に、コレクティブにおけるコモンミールの仕組みと意味について考察してきた。

本稿の意義は次の2点にまとめられる。第1に、コモンミールが居住者の集団形成を図る上でどのように機能しているのかを長期的かつ質的に把握できたことである。先行研究では、主にアンケート調査を基にして、コモンミールが有する「協働」性や共同性が居住者間の「コミュニティ形成」に寄与することが示唆されていたが、本稿では、長期的に実施したフィールドワークやインタビュー、および議事録といった質的データを用い、コモンを活用したコモンミールの合理的かつ自由度の高い仕組みが、居住者間の協同性や共同性を促進するだけでなく、個々のプライベートな生活とコレクティブの生活を両立させる持続的な集団形成に寄与していることを明らかにした。

第2に、こうした集団形成を踏まえ、コモンミールが居住者個人や家族のあり方を変容させる点を示したことである。先行研究では、コモンミールが居住者の意識面で変化をもたらすことが明らかにされたが、本稿では、意識面だけでなく、個人単位をベースとしたコモンミールの仕組みによって、新たな社会的役割を取得する個人や、居住者たちの相互依存的な関係の中で相対的に自立／自律した個人へと変化することを示した。さらにこうした個人の変容に伴い、性別役割分業を基盤としない家族や家族外にケアを開いていく家族といった、家族のあり方そのものも再編されていく点も明らかにした。これにより、既存の家族や会社といった社会集団とは異なる、個人のあり方に依拠した社会集団の可能性を提示することができたと考える。

加えて、本稿では、コモンミールの特性として、先行研究で指摘されていた合理性や「協働」性や共同性以外にも、新たに協同性や相互依存性といった特性も明らかにすることができた。

最後に、コモンミールは、コレクティブの居住者だけが恩恵を受けるように思われるかもしれない。だが、秋桜では、月1回「オープン・コモンミール」と呼ばれる、コモンミールを地域に開放する試みも行われている。その主な目的は、地域の人たちにもコレクティブのことを知ってもらうことで、参加者は単にコモンミールを食べるだけではなく、居住者同様、作ることも可能である。このように、秋桜ではコモンミールを住宅内で完結させるのではなく、地域にも開いていくことで、地域社会レベルでの取り組みへと発展させていく可能性が見受けられる。この点についてさらに研究を深めていくことが今後の課題である。

謝辞

調査実施にあたっては、秋桜の居住者の皆様及びCHCのスタッフをはじめ、ご協力頂いたすべての方々はこの場を借りて心より御礼申し上げます。

付記

本稿は、JSPS 科研費（課題番号：16J40007、19K23263、22K13536）による研究成果である。

注

- 1) ここでいう「協同」とは、諸個人が1つの事を行うために協力し合うことを意味する。一方、後述する先行研究で用いられる「協働」は、諸個人が協力して働くといった作業的な意味合いが強く示された用語となっている。本文中にはこれらとは別に「共同」という用語も使用している。これは、人々が共存することを意味する用語として使用している。
- 2) CHC は 2000 年 10 月、スウェーデンにルーツをもつコレクティブの普及活動・事業化・運営支援を目的に設立された（2014 年 9 月 2 日取得，<https://chc.or.jp/outline.html>）。
- 3) <https://chc.or.jp/chcproject/index.html>（2024 年 08 月 15 日取得）
- 4) 調査実施者は、櫻井典子と嶋崎東子と岡崎愛子の 3 名である。なお、調査概要の詳細については不明である。
- 5) 「秋桜」という名称は倫理的な面を配慮し仮名である。
- 6) 調査実施にあたっては、大阪大学人間科学研究科社会系研究倫理委員会（審査番号 2017036、2018004）、新島学園短期大学研究倫理委員会（審査番号 2020-01）、神戸松蔭女子学院大学研究倫理委員会（審査番号 2022-003）からそれぞれ承認を得たほか、毎年度秋桜の居住者組合から調査同意を得るとともに、インタビュー対象者からも調査ごとに同意を得て行った。
- 7) シェア住戸の場合、台所・浴室・トイレは 2 戸で共用。
- 8) 本平面図は CHC より提供していただいた。
- 9) 大人は入居時に居住者組合への加入が義務付けられる。子どもは 20 歳になる前に組合に加入するかどうかを本人が選択する（2024 年 10 月時点）。また組合費として、入居時に出資金（大人 1 人につき 25 万円、退去時返却）を拠出するほか、家賃とは別に毎月組合費の支払いがある（金額は年度によって異なるが、2024 年度は、大人単身世帯の場合 1 人あたり 10,900 円、大人 2 人以上の世帯の場合、2 人で 19,800 円、子どもは 1 人につき 500 円）。組合費は役員・運営委員や活動グループの費用、共用空間の備品購入費・光熱費などにあてられる。
- 10) 2024 年度は、役員（代表、副代表、会計監査、書記）、係（会計、会員、居住者集め、見学・取材対応、地域連携、建物）、活動グループ（ミール、みどり、ランドリー、当番表・掃除、キッズ、ペット、ワークショップ、防災・セーフティネット、イベント）で

構成される。居住者は毎年度、役員または係を1つと活動グループ1～2つへの参加が求められる。なお、役員と係は対外的に責任を持って組合運営を担うもの、活動グループは日々の住宅運営において必要不可欠な活動をマネジメントするもの、とそれぞれ位置づけられている。

- 11) コロナ禍においては、調理はコモンで行い、食事は各自の住戸で食べる形で継続した。
- 12) 秋桜では、2020年度から居住者組合の活動グループの1つとして「セーフティネット・グループ」を立ち上げ、年老いても住み続けられる住まいのあり方を模索している。この点については稿をあらためて論じたい。
- 13) とはいえ、当番をめぐってはフリーライドの問題がどうしても生じてしまう。そうした時、秋桜では定例会を中心とする「話し合い」を通じて、適宜コモンミールの仕組みそのものの見直しを図り、その時々状況やメンバーに応じてできるだけ居住者が無理なく当番に入ることができる柔軟な仕組みづくりを行っている。この点についても、稿を改めて論じたい。
- 14) この点について、Dさんによると、当時、Eさん自身、家庭を優先することに職場の理解が追いつかず、葛藤をきたすこともあったという。

文献

- 石東直子・コレクティブ応援団, 2000, 『コレクティブハウジングただいま奮闘中』学芸出版社.
- 小谷部育子, 1997, 『コレクティブハウジングの勧め』丸善.
- 小谷部育子編著, 2004, 『コレクティブハウジングで暮らそう——成熟社会のライフスタイルと住まいの選択』丸善.
- 水村容子, 2020, 『スウェーデンのコレクティブハウスにおける共食活動の運営と環境に関する研究』公益財団法人アーバンハウジング.
- 岡崎愛子・小谷部育子, 2003, 「コモンミール実践へ向けてのプロセスおよび意識変容に関する研究——多世代賃貸型コレクティブハウス『コレクティブハウスかんかん森』を通して」『日本建築学会大会学術講演梗概集』207-208.
- 岡崎愛子・小谷部育子, 2005, 「『コレクティブハウスかんかん森』におけるコモンミールのプロセスと意識変容に関する考察——コレクティブハウジングにおける居住者主体の住運営に関する研究(2)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』159-160.
- Vestbro, Dick Urban, 1997, "Collective Housing in Scandinavia: How Feminism Revised a Modernist Experiment," *Journal of Architectural and Planning Research*, (14) 4: 329-342.

(受付日: 2024. 11. 11)